

富奥村の経済危機を救った指導者



なかしまえいじ
中島栄治

(1903~1979)

中島栄治は、1903年（明治36）二日市村の松原家に生まれました。1917年（大正6）石川県立松任農学校に入学し、在学中に実母の生家である中島家（太平寺）の養子になりました。1920年（大正9）に農学校を卒業した中島は、学校で学んだ農業経営方法を実践し、営農青年のリーダーとして、農業経営改善に意欲的な青年の指導を行いました。

アメリカの株大暴落に端を発した1930年（昭和5）の昭和恐慌しょうわきょうこうによって農産物の価格が急激に下落しました。このため農村では多額の負債（借金）をかかえることになり、富奥村では負債が一戸平均700円以上にもなりました（現在の価格で約200万円以上）。

1932年（昭和7）富奥村は、村民全員で負債の整理と経営改善を行うため石川県から農村経済更正村こうせいの指定を受け、富奥村経済更正委員会が組織化されました。中島を中心とした委員会は、水稻すいとうの新品種の導入、肥料ひりょうの自給と春の田起し時に使用する借入馬かりいれうまの禁止、トマト（粟田新保）・スイカ（末松・清金）、養鯉ようり（上林）などの新事業を推進し、農業経営改善に着手しました。

農業経営が好転に向かった富奥村は、1936年（昭和11）に全国でも数少ない経済更正特別助成村に指定されました。中島が指導した富奥村の更生活動と実績は、望ましい農村のモデルとして全国的にも大きな注目を集めることになりました。

とみおくせいとうしゅうれんしゃ
村の家と富奥聖農修練舎

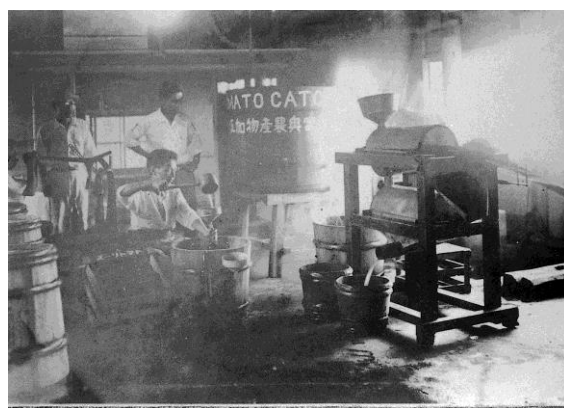
農業後継者育成を目指した中島は、1936年（昭和11）農村青年が農業経営や農村生活について意見交換や研究発表できる場として、中林に「村の家」をつくりました。翌年には聖農修練舎と呼ばれる施設を付設して新たな農業の学習場として生まれ変わり、農民研修では、地元のみならず石川県内各地からも青壮年が参加する一大農場となり「中島大学」とも呼ばれていました。



「村の家」



「村の家」につどう農村婦人と中島栄治（前列右から3人目）



経済更生事業

栗田トマトをソースにする加工場のようす
（富奥農産物加工組合）